

私は Web メディアの編集者として出版社に勤務しながら、学生生活を送りました。仕事と研究を同時に進めるのは大変そう、忙しそうと言われることもありますが、両立することの良さもたくさんあると考えています。使える時間や研究アプローチに制約が生じるからこそ、迷いを捨てて集中して取り組みますし、仕事を計画的に進める力や“報連相”のスキルは、研究でも生かれます。

また私の場合は、現在のキャリアとは関連が薄いものの、自分が本当に知りたいと思える研究テーマを選択しました。高校生、大学生の頃も学ぶことは好きでしたが、「良い成績をとらなければ」「将来に役立てなければ」などと、学びの先にあるものを気にしすぎているように思います。この二年間はそうした考えからは離れ、学問を心から楽しむことができました。両立生活には大変さ以上に楽しさがあるということを、多くの方に伝えたいです。

大学院での一番の醍醐味は、研究指導です。放送大学では一人で作業を進める時間が長いので、指導の場での先生の一言一句をしっかりと受け止め、研究に反映していくことが欠かせません。私は指導中・終了後にできるだけメモを取り、何度も読み返しながら文献収集や執筆を進めるようにしていました。その時はピンと来なくても、数ヶ月経ってから、「そういうことだったのか」とわかることが多々ありました。

続いて、両立生活を送る上で役立った方法を二つ紹介します。まず、仕事の繁忙期は思い切って仕事に集中することです。スキマ時間での勉強は積極的に行うべきですが、研究となると、構想をまとめる、論文の章立てを整理するなど、まとまった時間を確保しなければ進められないこともあります。仕事と研究を往復し、頭を頻繁に切り替えることは負担が大きく、「今日も手を付けられなかった」と自分を責めるのは心にも良くないため、メリハリが重要だと思います。

次に、応援してくれる人を自分から探しに行き、大切にすることです。通信制かつコロナ禍という状況で、同じように学生生活を送る人の姿が見えにくく、孤独だと感じたこともありました。しかし自分がどんな研究をしているか、今なにを感じているのかを伝えることで、職場の上司は忙しさに配慮してくださり、別の大学院に通う友人たちとは、論文作成の辛さ・おもしろさを分かち合うことができました。放送大学の学生の皆様からは SNS やブログを通じて励ましの声をいただきました。修了まで高いモチベーションを維持することができたのは、そうした方々のおかげです。

先に述べた通り、私は「目的のない学び」のために入学しましたが、修士論文を書き終えてみると、いつの間にか手に入っていたものがいくつもありました。そして指導教員の山岡龍一との出会いは、人生において最も大切な出会いの一つになりました。先生が書いたものを本当の意味で読めるようになるまで勉強を続けることが、現在の目標です。